図116　中才遺跡　南から　背後は升潟の集落

図115　遺跡の位置
５万分１地形図「弥彦」

中才遺跡　西蒲区曽根

中才遺跡は、西川の右岸（東方）約四キロメートルの水田地帯の、標高約一・五メートルの微高地に立地している。曽根市街地から東約四キロメートル、升潟集落からは南約二キロメートルの位置である。遺跡の範囲は、東西・南北とも約二〇〇メートルと推定されるが、現在は周囲一面が平坦な水田となっている。

昭和三十七（一九六二）年三月、区画整理に伴う暗渠排水工事中に、須恵器などの遺物が地下約五〇～六〇センチメートルの所で発見された。そのため同年四月に現地調査が行われ、須恵器の坏・甕、土師器の鍋などが見つかった。この結果を受けて、翌年、西川町教育委員会が上原甲子郎氏に依頼して二日間の発掘調査を実施し、須恵器の坏・坏蓋・壺・甕・横瓶、土師器の小甕・長胴甕・鍋などが出土した。これらの遺物の時代は、形の特徴などから九世紀代（平安時代）と推定される。また、漁具である管状土錘が二四点出土した。管状土錘とは、紐を通すための穴が通っている筒状の素焼きの錘である。中才遺跡で出土したものは「細形」

に分類される長さ三・七センチメートルほどの小形のもので、刺し網などの錘と推定されている。越後平野の低地帯の遺跡では、管状土錘が出土する遺跡が多く認められており、平安時代には魚網による内水面漁業が一般化していたのであろう。

図一一七は復元された横瓶で、横幅三二センチメートル、高さ二四センチメートルほどである。俵を横にして短い口を付けた形の貯蔵具で、その形から俵壺とも呼ばれた。横瓶は、ほとんどの地域では九世紀初めまでに廃れて姿を消すが、越後では九世紀末になってもよく使われた。新潟市域でも、平安時代の遺跡からは例外なく出土するほど普及していた器種であるが、何を入れたのかは分かっていない。

図117　横　瓶

中才遺跡から出土したこれらの遺物は、昭和五十二年（一九七七）に西川町の文化財に指定され、平成十七年の新潟市との合併により新潟市指定文化財に継承された。現在の新潟市域には、中才遺跡よりも遺構・遺物が正確に調査されている奈良・平安時代の遺跡が数多くある。しかし、旧西川町地域の同時代の様相を伝える資料としては、現在も重要なものであることは変わらない。